

農林省北海道農業試験場

作物第1部稲第2研究室の紹介

柿 本 彰

北海道農業試験場（杉穎夫場長）は、国道36号線（札幌―室蘭）沿いの札幌駅より約10 Km離れた羊ヶ丘に位置している。この地は、古くより札幌市の観光地として一般に知られている所で、年間30万人にのぼるほど多数の人が訪れており、その展望台は試験場用地の一隅に設けられている。

当場が約40年にわたって試験を行なっていた琴似より、この羊ヶ丘に集中移転をしたのが昭和41年であるから、庁舎、附属実験施設などは真新しく、畑試験の圃場は広く、しかもよく整備されているので、研究環境としては比較的恵まれているといつてよい。しかし、高台（標高約60 m）で北東風がまともに吹いてくるために、気温は平地より常に低いので、稲作りには必ずしも好条件でないことと、水田用水に乏しいなどの理由から、用地内に水田を設けることが出来なかった。したがって、試験場に近接した低地の民有田を買い上げ、試験圃に造成したが、こゝは庁舎より4 Kmも離れているので、多少の不便をしのいで稲作試験を実施している状態にある。

作物第1部（升尾洋一郎部長）は、育種、栽培、冷害など水稻関係3研究室と畑作関係5研究室の8研究室によって構成されており、この

うち寒地における水稻栽培に関する試験を担当しているのが当研究室である。

近年、北海道の稲作は約26万 ha に及ぶほどに著しい伸展をみせ、産米量も多く、主要稲作地帯として発展してきたが、内容的にみると、安定性、多収性、良質性、労働生産性などの今後解決を要する多くの問題点を内包している。

したがって、当研究室ではそれらの実態に対応して、いくつかの研究に取り組んでいるが、栽培の研究室は多面にわたる課題が宿命的に要求されるので、総体的にまとまりがないのはやむを得ないと考えている。現在は、主として登熟性を中心課題として寒地水稻の群落構造を追究しており、その他、収量限界向上、機械移植栽培など全国連絡試験の一貫として行なっている特別研究や新除草剤の作用特性、生育調節剤の利用、IBP関係など諸受託試験を実施している。このように多岐にわたる課題に対して、研究員は少数であるが、それでも良い成果をあげるよう努めているのが当研究室の表情である。

（筆者は稲第2研究室長）